

旧制浦和高等学校のアフガニスタン人留学生 — どうして彼は浦和で学ぶことになったのか —

An Afghan Student at the Former Urawa High School:
Why Did He Come to Study in Urawa?

嶋津 拓*

SHIMAZU Taku

埼玉大学の前身校のひとつである旧制浦和高等学校が、その約30年（1921年～1950年）の歴史の中で受け入れた外国人留学生は、同校が毎年発行していた『浦和高等学校一覧』（学校便覧）で確認する限り、アフガニスタンからの留学生ただひとりである。彼は1938年4月から1941年3月までの3年間、同校に在籍した。

本稿では、その留学生であるアブドラ・ラヒミを含めた6名のアフガニスタン人留学生が、この時代に日本に留学することになった経緯を概観しつつ、アブドラ・ラヒミが浦和高等学校に進学することになった理由について考察する。また、その考察を通じて、当時と今日に共通する課題について考えたい。

キーワード：アフガニスタン人留学生、旧制浦和高等学校、国際学友会

1. はじめに

埼玉大学の前身校のひとつである旧制浦和高等学校が、その約30年（1921年～1950年）の歴史の中で受け入れた外国人留学生は、同校が毎年発行していた『浦和高等学校一覧』（学校便覧）で確認する限り、アフガニスタンからの留学生ただひとりである¹。彼は1938年4月から1941年3月までの3年間、同校に在籍した。

本稿では、その留学生であるアブドラ・ラヒミ（Abdullah Rahimi）を含めた6名のアフガニスタン人留学生が、1930年代の後半期に日本に留学することになった経緯を概観しつつ、なかでもアブドラ・ラヒミに焦点をあて、彼が浦和高等学校に進学することになった事情について考察する。

2. 先行研究

1930年代の後半期に来日したアフガニスタン人留学生をテーマにした論文には竹本（1995）がある。このテーマで書かれた論文としては、管見の限り、これが唯一の先行研究であり、本稿も一次史料を検索するにあたっては、同論文に多くを依拠したが、この竹本の論文は、アフ

* しまづ・たく、埼玉大学大学院人文社会科学部研究科教授、言語政策論

¹ ただし、当時は日本の植民地だった台湾および朝鮮半島出身の学生も浦和高等学校には在籍していた。

ガニスタン人留学生を日本が招致するに際して策定した指導要綱の分析を主要テーマにしており、個々の留学生の状況については扱っていない。このため、なぜアブドラ・ラヒミが浦和高等学校に進学することになったのかという理由や経緯についても触れていない。

アブドラ・ラヒミを含む6名のアフガニスタン人留学生は、来日してからの2年間、東京の財団法人国際学友会（The International Students Institute）で日本語を学んだ。その国際学友会の日本語教育を扱った先行研究に河路（2006）がある。同書は、当時の国際学友会における日本語教育に関し、膨大な資料を綿密に調査することで、その実態を描き出した好著であるが、アフガニスタン人留学生に焦点をあわせたものではなく、また、アブドラ・ラヒミが浦和高等学校に進学した理由についても触れていない。

このような先行研究の現況から、本稿においては、上記の竹本（1995）および河路（2006）を参考にしつつも、おもに一次史料を用いて、1930年代の後半期に6名のアフガニスタン人留学生が日本に留学することになった経緯や政策的枠組について整理するとともに、なかでもアブドラ・ラヒミに焦点をあて、彼が浦和高等学校に進学することになった事情について考察する。

3. 国際文化事業

日本政府は1936年にアフガニスタンから6名の留学生を招聘している。それは「国際文化事業」の一環としての招聘である。

1933年、日本は国際連盟を脱退した。また、1920年代から1930年代にかけての時期は、ヨーロッパの国々が自国文化を海外に発信するための機関を相次いで設立していた時期でもある。すなわち、「世界の文明諸国があらゆる方面に互りて、自国の文化を内外に顕揚し宣布する為めに広大な施設を整へ文化活動に努力して互に後れざらん」²（国際文化振興会 1934：1-2）としていた時期でもあったのであり、日本は国際連盟脱退に伴う国際的な孤立を避けるとともに、他国に伍して、「自国文化の品位価値を發揮し、他国民をして尊敬と共に親愛同情の念を催さしむる」（国際文化振興会 1934：1）ことを主要目的として、「国際文化事業」を開始したとすることができる。

かかる「国際文化事業」を実施するため、1934年に日本政府は財団法人国際文化振興会（今日の独立行政法人国際交流基金の前身）を設立する。同会は、「国際文化事業」とはいつても、日本文化の海外に向けての発信と海外文化の受信の双方向的な交流ではなく、「日本及東方文化の海外宣揚」（国際文化振興会 1934：10）を図ることを中心的な課題とした。

この国際文化振興会が設立された翌年の1935年に、日本政府は財団法人国際学友会を設立する。同会は今日の独立行政法人日本学生支援機構の前身機関のひとつであるが、「国際文化事業」

² 本稿においては、引用文中における旧字体・カタカナをそれぞれ新字体・ひらがなに直した。また、文意を汲んで、適宜句読点を付した場合や促音表記にしたケースもある。ただし、仮名遣いは原文にしたがった。なお、引用文中には、今日からすると事実でない部分や適切でない表現も含まれているが、著作者の主観あるいは認識を反映している場合もありうるので、人物や機関の名称など明確な誤りを除いては、注釈等を施さなかった。また、誤字も訂正しなかった。

のうち、留学生の受入と派遣に関する業務は、この国際学友会が担当することになった。

このように、1930年代の中頃に日本は「国際文化事業」を実施するための体制を整えつつあったのだが、それと時期を同じくして、日本はアジアの数少ない独立国のひとつであるアフガニスタンとの関係を深めていくことになる。

1930年、日本とアフガニスタンは修好条約に調印した（発効は1931年）。これに伴い、1933年にはアフガニスタン政府が東京に、翌年の1934年には日本政府がアフガニスタンの首都カブールに、それぞれ公使館を設置した。また、人的交流の機会も増え、1931年頃にはアフガニスタン政府の要請に基づいて、日本政府が柔道の専門家（高垣信造）をアフガニスタンに派遣している。また、1934年には、これもアフガニスタン政府の要請をうけて、日本から土木・農業の専門家（尾崎三雄）が同国に派遣されている。

このような状況の中で、1935年12月、前述の国際学友会は「国際文化事業」を所掌していた外務省文化事業部に対して、「アフガニスタン国留学学生招致」事業に関する申請書を提出した。同申請書においては、この学生招致事業が「日本文化宣揚の上より観て最も有意義なる企画」と位置づけられている。そして、国際学友会は同事業の実施に要する経費として、4,570円の交付を外務省に要請した（竹本1995：46）。

ただし、この「アフガニスタン国留学学生招致」事業は、国際学友会の主導によって企画されたものというよりは、初代の在アフガニスタン日本公使に就任した北田正元の意見具申に基づいて計画されたものようだ。当時、国際学友会に勤務していた金澤謹は、1970年代になってから次のように回顧している。

東夷のアフガニスタン国は周知のようにイギリスとロシアの勢力の角逐場で、どうしてそれらの勢力を排除するかを考えていたわけで、その両国を牽制する方途として、独、仏の教育制度を採用。独系のカレッジはネジャットカで、仏系のカレッジをエステクラールと言い、その何れにも独、仏人教師を迎え、教課過程（ママ）も両国のそれと全く同様とし、このカレッジの卒業者は、それぞれ独、仏の大学に入学し得るような仕組にしていたのであった。

しかし、一方アフガニスタンの官民は日本との接触を非常に熱望していたので、当時の北田公使は日本側の費用負担で同国から優秀な青年学徒を日本に派遣することが、彼我両国のため、最も時宜を得た措置であることに着眼されたのであった（金澤1973：12）。

すなわち、この「アフガニスタン国留学学生招致」事業は、国際学友会というよりも、外務省の主導によって企画されたものだったと言うことができるのであるが、その外務省も、かかる「アフガニスタン国留学学生招致」事業を「日本文化宣揚の上より観て最も有意義なる企画」と位置づけていたことに変わりはない。すなわち、アフガニスタンからの留学生が日本留学を終えた後に、「日本文化の優秀を故国に報告し本邦文化を同国に宣揚する」（外務省文化事業部1936：264-265）ことを期待していたのである。

4. アフガニスタン人留学生の来日

1935年の初冬には、アフガニスタンの青年6名が近々日本に留学する予定であることが、日本国内でも盛んに報道されるようになった。たとえば、1935年11月15日の東京日日新聞（朝刊）は、「日本文化に憧れる西アジアの王国：アフガニスタンから留学生」と題して、次のように報じている。

西アジアの王国アフガニスタンから東下ミカドの国の文化にあこがれて六人の留学生が明春日本にやってくる。最近日本商品一主として雑貨や綿布がさかんにアフガニスタンに輸出され、日本に取ってはいいお得意さまである。同国はインド、ロシア、ペルシアに囲まれた山岳国のため英国とソヴィエト・ロシアから事ごとに干渉を受けているが、ザヒール・シャー国王は日本の華々しい発展に刺戟され、是非とも英露の白人系の羈絆から脱して東洋の盟主日本に指導を仰ごうという大変な親日ぶりで、北田正之公使もアジア人のアジア建設のため大いに好意を寄せいろいろ斡旋の労を取り、こんどいよいよ産業、軍事の将来の指導者養成のため有為の青年六氏を選抜して日本に留学させることを閣議で決め、この旨同公使を通じてわが外務省に依頼してきた。わが外務省でも同種のアジアの友邦のことであり、また大切な商品のお得意さまでもあるので双手をあげて歓迎、文化事業部の柳沢（筆者註：柳沢健）第三課長が専らこの世話焼きに奔走した結果、六人のうち五人までは欣然明春一月十一日ボンベイ出帆の安洋丸で日本に来朝することになった。この留学生のうち一人は若き王族で主として航空事業を研究するという（神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫「東京日日新聞」文化3-059）。

1936年1月、アフガニスタンの青年6名が日本留学のためカブールを出発した（JACAR：B04011347000）。出発に際して、彼らはアフガニスタン国王に謁見し、次の言葉を賜ったという。

今回諸子は選ばれて、日本に赴くことに決定せり。諸子は今や進歩せる学芸と技術とを学び、其の知識を得るため留学し且其の帰国後は汝の祖国に奉仕せんとす。我がアフガニスタン国は忠実なる人民及官吏を必要とすること甚だ切なり。諸子が国家に奉仕するは天の最大の恩賞なるを知らざるべからず（金澤1973：13）。

アフガニスタン人留学生6名は、1936年2月6日に神戸に到着し、国際学友会職員の出迎えを受けた後、同月8日に東京の国際学友会館（国際学友会が運営）に入った（金澤1973：12）。この6名の青年の中に、のちに浦和高等学校に進学することになるアブドラ・ラヒミがいた。彼は1914年1月9日生まれれの22歳で、父親はアフガニスタン大蔵省の支出局長を務めていた

という（讀賣新聞社 1938 : 2）。

このアブドラ・ラヒミを含む 6 名のアフガニスタン人留学生は、来日まで日本語を学習する機会がなかったようだ。このため、彼らは国際学友会で日本語の入門レベルを学ぶことになったのだが、その様子について、前述の金沢謹は次のように回顧している。

六人のアフガニスタン学生諸君が、日本での生活に慣れるための苦勞、初歩の日本語を覚えようとするための苦勞は、側の見る眼もいじらしいような努力の連続であった。中国からの留学生などに較べ、この生粋の回教国からの青年諸君には解せない沢山の日本の風習があり、逆に私たちから見れば奇習とも見える彼らの習俗があった（金澤 1973 : 13-14）。

アフガニスタンからの留学生 6 名が日本語を学んだのは、日本での生活のためのみならず、日本の「官立大学入学」（外務省文化事業部 1937 : 189）の希望を有していたからである。

国際学友会は、その設立時に策定した『国際学友会会則並事業綱要』において、「日本語の教授」を所掌業務のひとつに含めていた（河路 2006 : 40）。そして、設立翌年の 1936 年には留学生に対する日本語教育を開始している。しかし、河路（2006）によれば、当時の国際学友会における日本語教育は、「必ずしも、日本語によって高等教育を受けられるまでの高い日本語能力をめざす組織的な教育活動が計画されていたことを意味するものではなかった」（河路 2006 : 40）という。前述の『国際学友会会則並事業綱要』にも、日本語教育に関しては、「本会に於ては可及的短期間に日常生活に必要な日本語の会話を速成教授」とのみ記載されている（河路 2006 : 40）。すなわち、アフガニスタンからの留学生 6 名が希望していた「官立大学入学」以降に必要な日本語能力、換言すれば、大学での学習・研究のために必要な日本語能力の養成までは考慮されていなかったのである。

このように、アフガニスタンからの留学生 6 名は、日本の「官立大学入学」を希望していたにも関わらず、国際学友会では「日常生活に必要な日本語の会話」のみを学んでいたようなのだが、それと同時に、彼らは東京帝国大学や東京工業大学に聴講生として通ってもいた。アブドラ・ラヒミの場合は、東京帝国大学工学部冶金学科の聴講生になっている（外務省文化事業部 1936 : 282）。彼の指導教授は、冶金学が専門で、戦後に石炭庁長官や秋田大学長を務めることになる佐野秀之助だった（讀賣新聞 1938 : 2）。

前述のように、アフガニスタン人留学生 6 名は「官立大学入学」を希望していた。しかし、彼らが「官立大学入学」をどれだけ希望しても、日本語能力の面で、あるいは当時の日本における大学制度の上からも、留学生が正規の学生として日本の官立大学に入学し、学士号を取得することはきわめて困難だった。その間の事情について、金澤は次のように述べている。

来日当初の彼らの勉強計画は、出来る限り短期間に日本語を会得し、一年か二年内に、日本の大学（彼らの希望は東京帝大）を日本学生と同様の資格で卒業し、学士の称号を得て帰国することであった。

一方、東京帝国大学や工業大学（筆者註：東京工業大学）当局では、たとえ彼らがアフガニスタン国で高等学校（十二年制）を終えたものであるとしても、これを本科生として収容することは日本語学（筆者註：日本語能力）の点、入学試験難並びに入学規程や学則などより認めるわけには行かず、僅かに大学当局の好意によって、聴講生、チューター制による研究生、外国人特別生、介補などの便法に単に講義を聴き、一部の実験に参加を許可される程度に止まり、彼らの期待するように、本科生として学士号を獲得するなどということは到底不可能だという見解であった。

彼らは当初の予言（ママ）が容易に実現せず、本国政府の多大の期待に背かざるを得ないような事態に立ち至り、悶々として苦慮している頃、突然、すなわち昭和十二年七月、本国政府の提議により、暑中休暇を利用して一時帰国することになった（金澤 1973 : 14）。

日本政府が「アフガニスタン国留学学生招致」事業を企画したのは、前述のように、「日本文化宣揚」が大きな目的だった。それに対して、6名のアフガニスタン人留学生は、「学士の称号を得て帰国する」ことを留学目的としていた。日本政府が意図していた「日本文化宣揚」という目的からは、海外から留学生を日本に招聘し、日本語を学ばせるとともに日本で生活させ、聴講生等の形態で大学に通わせ、「単に講義を聴き、一部の実験に参加を許可」する、すなわち、日本の大学の雰囲気を経験させることだけで充分だったかもしれない。しかし、アフガニスタンからの留学生6名の目的は、あくまでも「学士の称号を得て帰国する」ことにあり、日本に滞在することも、日本語を学習することも、そのための手段でしかなかった。換言すれば、「留学目的」という点で、日本政府と留学生との間には齟齬があったのである。

1937年7月にアフガニスタンに一時帰国した6名は、同年10月に再来日する。その際、彼らは次のような決意をして日本に戻ってきたという。

- 一、あくまで留学の目的を達成するため、日本の最高学府を日本人学生と対等の資格を以て卒業し学士号を取得すること。
- 一、このためには留学期間が如何に長引くとも苦しからず、目的に邁進すること（金澤 1973 : 14-15）。

この決意からアフガニスタン人留学生6名は、「あくまでも学士号の獲得を目指し外務省、文部省並学校当局と種々折衝」（外務省文化事業部第二課 1939 : 86）した。そして、この「留学目的」の齟齬に関する問題は、日本とアフガニスタンとの外交問題にも発展しかねなかったこともあってか、最終的には日本の外務省も文部省も、留学生自身の「留学目的」に沿った形で

の解決策を模索することになった。

1938年3月1日の讀賣新聞（夕刊）は、「アフガン留学生に東大の門開く：実力試験して正式の本科へ」という表題の記事で、次のように報じている。

躍進ニッポンに憧れて来朝する外国人留学生は最近年々多くなる一方であるが、東京帝大をはじめわが国の各大学ではこれまで彼らの日本語学（筆者註：日本語能力）の不十分、入学規定（ママ）、学則等の関係から聴講生、研究生、介補等の便法で単に講義を聴講し、一部の研究実験等に参加でき得るといふ程度に止めてゐた。ゆゑ外国人で正式に日本の大学を卒業、学士号を得て帰国した者は数へるほどしかなかった。中でも東京帝大は開校以来医学部からたった一人の“学士”を出した。けで外国人には殆どその門を閉ざしてゐた。ところが偶然にも一昨年九月外務省が招致したアフガニスタン学生六名の東大本科入学志望から外務省と大学当局との間で二年間にわたって折衝が続けられた結果、このほどやっと双方の間に諒解が成立して東大側で実力試験をしたうへ成績次第では本科生または外国人学生規定（ママ）による特別生として入学せしめ、学士号を贈与しようといふ英断ぶりを示し、目下うち三名に対して試験施行中であるが、幸ひこれが実現すれば、東大がまづ全国大学に魁けて外人への門戸開放の先鞭をつけるものとして非常に期待されてゐる（讀賣新聞 1938：2）。

この措置に伴い、アフガニスタン人留学生は、「入学資格必ずしも本科生に等しからざれども卒業後の資格に関しては学校当局の諒解の下に何れも本邦大学の学士号を授けらるる」（外務省文化事業部 1938：187）こととなった。そして、彼らの多くは日本の大学に進学することになる。外務省文化事業部の 1938 年度執務報告によれば、アフガニスタン人留学生 6 名の進学先および身分は、下記のとおりである（外務省文化事業部 1938：187）³。

【表 1】アフガニスタン人留学生の進学先・身分

氏名	年齢	進学先・身分
アブドラ・ヤフタリ (Abdullah Jau)	23	東京帝国大学経済学部選科生
アブドラ・ハーキム (Abdul Hakim)	22	東京帝国大学文学部本科生
アブドラ・ラヒミ (Abdullah Rahimi)	23	浦和高等学校理科甲類
ゴラム・ナクシバンド (Gollam Nacshband)	21	東京帝国大学農学部外国人学生
ムハッド・ハッサン (Mohammad Hassan)	25	東京工業大学紡績科外国人学生
ヌール・アーマッド (Nour Ahmad)	28	東京工業大学紡績科外国人学生 ⁴

この表からも明らかなおおり、6名のうち5名は大学に進学した。しかし、アブドラ・ラヒ

³ 年齢は 1938 年 1 月 1 日現在の年齢。

⁴ ヌール・アーマッドは、のちに東京美術学校（現在の東京芸術大学）に転校している。結果的に、アフガニスタン人留学生 6 名のうち学士号を取得できなかったのは彼だけなのだが、1942 年 10 月 12 日の朝日新聞（朝刊）によれば、ヌール・アーマッドが東京美術学校彫金科を卒業するにあたり制作した作品（銅土耳古風紋様フルーツ皿）は展覧に入選したという（朝日新聞 1942：2）。

ミだけは高等学校に進学することになった。彼より年下の者も大学に進学しているので、また、彼自身すでに東京帝国大学工学部冶金学科の聴講生でもあったから、アブドラ・ラヒミも大学進学要件は満たしていたはずである。それにもかかわらず彼だけが高等学校に進むことになった理由としては、たとえば基礎学力が不足していたなどの要因も推測できるのだが、詳細は不明である。ただし、当時の関係者の証言によると、アブドラ・ラヒミの場合は、日本語能力の点で問題を抱えていたことだけは間違いないようだ。のちに浦和高等学校でアブドラ・ラヒミと同級生になった者は、東京帝国大学冶金学科の出身者から、1980年代に下記のような話を聞いたことがあったという。

(筆者註:アブドラ・ラヒミは)最初東大に入って、その人と同じクラスに入ったんだって。ところがなんか、日本語ができないとかなんとか言って、東大からまた浦高(筆者註:浦和高等学校)へ戻ったのだった。年は私より五つか六つぐらい多かった(旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編 1990:378-379)。

前述のように、アブドラ・ラヒミは国際学友会で日本語を学んでいた。しかし、これも前述したように、当時の国際学友会における日本語教育は、「可及的短期間に日常生活に必要な日本語の会話を速成教授」するものであり、大学で学習・研究できるだけの日本語能力、すなわち(2000年代に入ってから盛んに使われるようになった表現を借りるならば)「アカデミック・ジャパニーズ」(Academic Japanese)の能力養成までは視野に入れていなかった。

アブドラ・ラヒミの場合も、彼の浦和高等学校時代の同級生の証言によれば、日本語での日常会話には困らなかったようである(花輪 1990:340)。しかし、「アカデミック・ジャパニーズ」の面では不十分と判断されたのかもしれない。それに対して、他の5名のアフガニスタン人留学生は、彼らも国際学友会ではアブドラ・ラヒミと同じ日本語教育しか受けなかったのだが、少なくともアブドラ・ラヒミに比べれば、「アカデミック・ジャパニーズ」の能力が備わっていると判断されたのだろう。それが6名のアフガニスタン人留学生の中でアブドラ・ラヒミだけが大学ではなく高等学校に進学することになった要因(あるいは要因のひとつ)ではなかったかと思われる。

アブドラ・ラヒミの浦和高等学校での同級生は次のように証言している。

われわれのクラスに、一人の外国人留学生が入ってきた。縮れ毛で体格のがっちりした明るい青年であった。アフガニスタンのアブドラ・ラヒミ君である。浦高に入学する前に日本語の会話を習ったそうで、日常会話はそれほど困らなかったようであるが、先生の講義を理解するのに苦労しただろうと思う(花輪 1990:340)。

すなわち、アブドラ・ラヒミは「日常会話」に困らないだけの日本語能力は身につけていた

ようだ。しかし、「先生の講義を理解する」だけの日本語能力、すなわち「アカデミック・ジャパニーズ」の面では、浦和高等学校に進学した後も、難を抱えていたらしい。

この「アカデミック・ジャパニーズ」の能力不足だけが理由だったのか、それとも他にも理由があったのかは不明だが、いずれにせよ、「アカデミック・ジャパニーズ」の能力が充分ではないと判断されたことから（あるいは、それが理由のひとつとなって）、アブドラ・ラヒミだけは、大学ではなく高等学校に進学することになったと考えることができる。また、前述のように、彼を含む6名のアフガニスタン人留学生は、一時帰国中に「あくまで留学の目的を達成する」ため、「留学期間が如何に長引くとも苦しからず、目的に邁進する」と決意していたので、アブドラ・ラヒミ自身も、この高等学校進学を受け入れたのだろう。

アブドラ・ラヒミの浦和高等学校への進学は、国際学友会による「本邦学校入学並研究上の斡旋」（外務省文化事業部第二課 1939：96）によって決まった。しかし、全国の官立高等学校の中から、どうして浦和高等学校が選ばれたのかという点は不明である。旧制高等学校の留学生受入という点では、たとえば東京の第一高等学校は、1899年から清国の留学生を入学させている。また、1907年に日本政府と清国政府との間で締結された協定に基づき、同校には清国留学生のための特設予科が設置され、この特設予科を修了した清国（のちに中華民国）の留学生は、第一高等学校から第八高等学校までの、いわゆる「ナンバー・スクール」を中心に全国の高等学校に進学した。1909年から1932年までの間に第一高等学校の特設予科を修了した留学生は700名以上にのぼるが、そのうち第一高等学校には115名、第三高等学校（京都）には110名、第八高等学校（名古屋）には104名、第六高等学校（岡山）には97名が、それぞれ進学している（厳 2009：11）。

このように多くの留学生を受け入れてきた実績のある高等学校と異なり、浦和高等学校は留学生を受け入れた実績がない。しかもアブドラ・ラヒミは非漢字圏出身の留学生である。その彼をどうして浦和高等学校が受け入れることになったのかは不明だが、可能性のひとつとしては、アブドラ・ラヒミを含む6名のアフガニスタン人留学生は、東京にある国際学友会（実質的には外務省）によって招聘された者たちだったから、彼らを東京または東京の近郊に住まわせて、その生活や学業の状況を把握しておきたいという希望が、招聘元の国際学友会あるいは外務省にあったのかもしれない。また、その希望を東京あるいはその近郊に位置する高等学校の中で受け入れたのが浦和高等学校だけだったということも推測できる。ただし、これらは傍証があることではなく、あくまでも推測に過ぎない。

5. 浦和高等学校のアブドラ・ラヒミ

1938年4月、アブドラ・ラヒミは浦和高等学校の理科甲類に入学した⁵。同類は、英語を第

⁵ それぞれの進学先に入学した時点で、アフガニスタン人留学生6名は国際学友会が経営する国際学友会館を出て、それぞれ別の住居で生活していたようだ。1939年の時点で、アブドラ・ラヒミは「東京市渋谷区千駄谷 5-902 新宿ハウス」に居住している（JACAR：C04014773100）。

1 外国語とする理系のクラスである。同校が毎年発行していた『浦和高等学校一覧』で確認する限り、彼は浦和高等学校が受け入れた最初にして最後の留学生である⁶。

前述のように、アブドラ・ラヒミは「アカデミック・ジャパニーズ」の面で問題を抱えていたようだ。しかし、彼が浦和高等学校に在籍していた年次の『浦和高等学校一覧』で確認する限りでは、この時期に同校が彼のために日本語教育の特別科目を開設したり、そのための人員を特別に配置したりした形跡は見られない。どうやら彼は他の生徒と全く同じ授業を受けていたようである。ある同級生は、浦和高等学校を卒業して約半世紀ちかくが経過した時点で、ドイツ語の授業におけるアブドラ・ラヒミの様子を次のように回想している。

新学期が始まってまもなく、上村先生（筆者註：上村清延）のドイツ語の授業で彼は上村先生に指された。そのとき彼は、日本語で答えるのが難しかったのだろう。しばらくして突然、外国語でペラペラしゃべりだした。すると上村先生も外国語で話された。何回かのやりとりがくり返された。もちろんドイツ語でのやりとりであったのだが、彼はアフガニスタンではドイツ語を習っていたそうである。ドイツに留学すれば楽だろうなどと思った（花輪 1990：340）。

この記述からも、いわゆる「アカデミック・ジャパニーズ」の面で、アブドラ・ラヒミは浦和高等学校に進学したあとも苦労していたことがわかる。しかし、外務省は「アフガニスタン国留学学生招致」事業を日本国内に向けて紹介するときには、かかる「アカデミック・ジャパニーズ」に関する事など、留学生自身が抱えていた問題点にはいっさい触れず、同事業の意義や成果のみを強調している。たとえば、在アフガニスタン日本公使の北田は、外務省文化事業部が 1938 年に発行した『中央アジアの回教国—アフガニスタンの話—』というパンフレットの中で、次のように述べている。

「アフガニスタン」国のがわが国への敬慕の念は更に進んで、優秀な日本文化に対する真摯な憧憬となって現はれて参り、「アフガニスタン」国政府は久しく「ヨーロッパ」文明に馴れてをりましたこの国に、清新な日本文化を吸収し併せて日「ア」親善関係を増進するため、わが国にその最初の留学生六名を送ることを決定したのであります。これに対しましてわが国では、外務省文化事業部の補助団体たるところの国際学友会が学費給与及宿舍提供、勉学

⁶ アブドラ・ラヒミと同じ 1938 年に浦和高等学校に入学した者は 148 名だった。その中には、埼玉県立浦和中学校出身の鹿取泰衛（文科乙類）もいた。彼は浦和高等学校を卒業したのち東京帝国大学法学部に進学。大学卒業後は外務省に入り、官房長、外務審議官、在ソヴィエト連邦大使などを務めたのち、国際交流基金（前述の「国際文化振興会」の後身）の理事長に就任する。鹿取自身が語っているところによれば、当時の「国際交流基金は初代理事長が今日出海先輩（筆者註：彼も浦和高等学校の出身者だった）だったせいか、何かしら浦高めいた知的雰囲気か漂って」（鹿取 1990：115）いたという。この鹿取が国際交流基金理事長だった 1989 年に、同基金は「外国人の日本語教師を再教育する研修施設を浦高跡地の間近に開設」（鹿取 1990：115）している。この研修施設、すなわち「国際交流基金日本語国際センター」（The Japan Foundation Japanese Language Institute, Urawa）の開設に際して、鹿取は「このセンターが浦高の生まれ変わりになり、そこで学ぶ各国の俊才が浦高の自由な学風を継承し、日本の正しい理解者に育っていくことを願って」（鹿取 1990：115）いたという。

上の斡旋などの世話を引受けることに話が纏まり、この六名の学生は昭和十一年二月末東京に到着致しました。東京到着後は、国際学友会館で一通り日本語を修得しまして、現在では六名の内四名は東京帝大で、経済学及商業学、鉱山学、園芸学（果樹、蔬菜）を、他の二名は東京工業大学で紡績に関する学科を専攻してをります。私の聞き及びましたところでは、その「アフガニスタン」から渡来しましたる学生達は孰れも成績優秀で、驚くほど日本語に熟達しまして、所期の学業に勉励しつつあることは勿論、日本文化の凡ゆる方面に興味を持って研鑽してあるさうであります（北田 1938 : 12-13）。

アブドラ・ラヒミも、他の5名のアフガニスタン人留学生とともに、来日直後からの2年間、国際学友会で日本語を学んだ。北田の言うとおりであれば、彼も「驚くほど日本語に熟達」したはずである。しかし、アブドラ・ラヒミが「アカデミック・ジャパニーズ」の面で苦勞していたのではなかったかと考えられることは、前述したとおりである。

上記の北田の文章は、アブドラ・ラヒミが東京帝国大学工学部に聴講生として在籍していた頃の状況について述べたものである。しかし、彼が「東大からまた浦高へ戻った」（旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編 1990 : 378-379）あとにおいても、外務省が「国際文化事業」あるいは「アフガニスタン国留学学生招致」事業を日本国内に向けて紹介するときには、アブドラ・ラヒミが「アカデミック・ジャパニーズ」の問題を抱えていたことや、それが理由（のひとつ）で「東大からまた浦高へ戻った」ことに触れることはなかった。たとえば、彼が浦和高等学校に入学した翌年の1939年に外務省が発行した『世界に伸び行く日本語』という表題の小冊子においては、同国からの留学生6名の現況が次のように紹介されている。

昭和十一年に外務省の助成団体である国際学友会が、同国から招致した六名の留学生は現在東京帝国大学其の他に於て勉学を続けて居りますが、彼等は皆非常に日本語が上手でありますから、学業を終へて帰国の上は大に日本語や日本文化の普及に効果があるものと存じま
す（外務省 1939 : 64）。

ここでも、前述の北田の文章と同様、アフガニスタンからの留学生6名は「東京帝国大学其の他に於て勉学を続けて」いることや、「彼等は皆非常に日本語が上手」であることが紹介されているだけで、「東大からまた浦高へ戻った」留学生が存在することには触れていない。「国際文化事業」あるいは「アフガニスタン国留学学生招致」事業の意義を紹介する上で、大学から高等学校に「戻った」留学生が存在することは、たとえそれが留学生自身の「学士の称号を得て帰国する」という留学目的を達成するための措置だったにせよ、彼らの実質的な招聘元である外務省にとっては、積極的に発信したい事柄ではなかったのだろう⁷。

⁷ ただし、アブドラ・ラヒミも他の5名のアフガニスタン人留学生と同様、日本政府にとっては「日本文化宣揚」という観点からした重要な留学生だったことに変わりはない。彼が浦和高等学校の2年生だった1939年の8月から9月にかけて、日本政府はアブドラ・ラヒミを含む6名のアフガニスタン人留学生を北海道旅行に招待している（JACAR : C04014773100）。また、同年11月には文部大臣が彼らを官邸に招いて晚餐をともにしている（関根編 2006 : 186）。

前述のように、アブドラ・ラヒミの同級生たちの証言によれば、彼は浦和高等学校在籍中も、「先生の講義を理解する」だけの日本語能力、すなわち「アカデミック・ジャパニーズ」の面で苦勞していたようなのだが、この「アカデミック・ジャパニーズ」の問題は、結果的に卒業時まで尾を引いた模様である。アブドラ・ラヒミが浦和高等学校の第2学年に在籍していた1939年度の『浦和高等学校一覽』を見ると、この『一覽』には生徒の氏名が「第三学年及第二学年は成績順」（浦和高等学校 1940：119）に記載されているのだが、アブドラ・ラヒミの名前は、第2学年理科甲類の生徒名簿の末尾に記載されている（浦和高等学校 1940：125）。また、彼が浦和高等学校を卒業した後の1942年に発行された『一覽』の「卒業者氏名」は「卒業成績順」（浦和高等学校 1942：129）に記載されているのだが、ここでもアブドラ・ラヒミの名前は、1941年3月に理科甲類を卒業した生徒名簿の末尾に記載されている（浦和高等学校 1942：192）。これらのことから、彼は学業の面で苦勞していたことがうかがわれるのだが、その最大の理由は、これまで述べてきた状況から推測するに、やはり「アカデミック・ジャパニーズ」の能力が充分ではなかったことにあったのではないと思われる。

6. アブドラ・ラヒミの大学進学と帰国

アブドラ・ラヒミが浦和高等学校でも「アカデミック・ジャパニーズ」の面で苦勞していたのではなかったかと推測できることは既述のとおりである。また、在校時あるいは卒業時の成績が振るわなかったのも、それが理由ではなかったかと考えられることも前述した。

それでも、彼は1941年3月に浦和高等学校を卒業し、京都帝国大学工学部採鉱冶金学科に進学した⁸。アブドラ・ラヒミのみが、他の5名のアフガニスタン人留学生と異なり、東京ではなく京都の大学に進学した理由については不明だが、外務省外交史料館に保存されている文書によれば、その大学進学までの経緯については、まず1941年2月にアフガニスタン政府が日本政府（外務省）に対して、同年3月に浦和高等学校を卒業見込のアブドラ・ラヒミの「上級学校入学に関し便宜供与」を要請している。これを受けて、外務省欧亜局は国際学友会に対し、「適当なる学校」の「選定」と「入学」に関する「取計」を求めた。このため国際学友会は、1941年2月10日、同会の役員を京都帝国大学に「出張せしめ工学部長並に関係教授に委細説明」とともに「盡力方依頼」した。また、外務省は松岡洋右大臣名で京都帝国大学総長に対し、「入学許可」の「取計」を求めている（JACAR：B04011346500）。

このような諸段階を経て、アブドラ・ラヒミの京都帝国大学工学部への進学は決まったのだが、彼が浦和高等学校に入学した年度に東京帝国大学や東京工業大学に進学したアフガニスタン人留学生4名は、アブドラ・ラヒミが京都帝国大学に入学したときには、すでに学士号を取得していた。アブドラ・ラヒミは彼らよりも、「東大からまた浦高へ戻った」分の3年遅れで大学に進学したわけである。

⁸ 金澤（1973）によれば、アブドラ・ラヒミは東京帝国大学工学部に進学したことになっているが（金澤 1973：127）、これは誤りである。

アブドラ・ラヒミが京都帝国大学に入学した年には太平洋戦争が勃発している。彼の京都時代の消息は不明であるが、開戦後も彼は京都にとどまって勉学を続けたようで、結果的に京都帝国大学から学士号を取得することができた。学士号を取得したアブドラ・ラヒミは、東京工業大学から東京美術学校に転校して、同校を卒業したヌール・アーマッドとともに、1943年にシベリア経由で帰国の途につき、翌年1月にカブールに到着した。彼らの招聘元である国際学友会や外務省の「日本文化宣揚」という目的はともかくとして、「学士の称号を得て帰国する」というアブドラ・ラヒミ自身の留学目的は、ここに達成されたわけであり、その意味では彼の日本留学は成功したと言えるだろう。

帰国後、アブドラ・ラヒミは鉱山省に入った（JACAR：B04011346500）。その時には、彼より3年早く大学を卒業したアフガニスタン人留学生4名も、すでに帰国していた。1943年12月13日付で在アフガニスタン日本公使館が東京の外務本省に発信した公電によれば、当該4名の帰国後の状況は次のとおりである（B04011356900）。

【表2】1943年12月時点における帰国留学生の状況

氏名	卒業大学・学部	進学先・状況
アブドラ・ヤフタリ (Abdullah Jau)	東京帝国大学経済学部	「ダ、アフガニスタン」銀行信用貸付課長 兼 政治専門学校教授
アブドラ・ハーキム (Abdul Hakim)	東京帝国大学文学部	文部省教育局専門学務課長（傍ら政治専門学校に於て社会学の講義を担当す）
ゴラム・ナクシバンド (Gollam Nacshband)	東京帝国大学農学部	農業局課長 兼「カブール」農学校長
ムハッド・ハッサン (Mohammad Hassan)	東京工業大学紡績科	失職中

7. 戦後のアブドラ・ラヒミ

戦後、日本とアフガニスタンの国交が回復するのは1955年のことであるが、それに先立つ1954年に京都大学は東西文化交流遺跡調査のため、同大学人文科学研究科教授で東洋史学者の岩村忍⁹をアフガニスタンに派遣している。岩村は太平洋戦争の開戦前には外務省文化事業部に嘱託として勤務していたことがあり、その立場から1930年代の後半期に国際学友会（実質的には外務省）が招聘したアフガニスタン人留学生6名とも交流があった。このため、岩村のアフガニスタン出張の目的は、「東西文化交流にかんする研究であるが、かつて氏が国際学友会において面倒をみた学生達と会い、日本とアフガニスタンとの文化的交歓をはかるのもその目的の一つ」（日本文化人類学会1954：280-281）に設定された。

⁹ 前述の金澤謹が国際学友会に勤務するようになったのは、外務省文化事業部の嘱託を務めていた岩村の紹介によるものだったという（金澤1973：127）。また、1943年から国際学友会で日本語教育に従事した高橋一夫が1974年（当時、高橋は東京外国語大学附属日本語学校長を務めていた）に証言しているところによると、1938年に言語学者の服部四郎が国際学友会で日本語教育に従事するようになったきっかけを作ったのは「金澤謹と岩村忍」で、両名が「この日本語教育を何とか確立させようと話していたところ、服部四郎さんが今は大学の講師だが時間がありそうだったので、服部四郎さんに来てもらったんです」とのことである（河路2009：308）

アフガニスタン滞在中に岩村は、「戦前日本に留学し、京大、東大その他を卒業した六人のアフガン人の訪問」を受けた。また、「京大工学部出身で鉱山技師をしているラヒミ君に招待され初めて純粋のアフガン料理をごちそうになった」という（岩村 1954 : 3）。

その岩村は、元留学生 6 名と面会する中で、次のような感想を抱くようになる。

旧留学生諸君と話し合っているうちに考えさせられる事情を見出した。アフガニスタンでは官吏の地位は学歴によって左右され、欧米に留学したものは、ほとんど全部がドクターの学位を持って帰るが、日本への留学生は旧制大学の学士であり、ここではマスター・オブ・アーツ以下にしか認められないらしい。外務省の補助団体である国際学友会の招致学生として日本に招いたこれらの人に対し、日本政府はある程度の責任がある。特にこの人たちのためばかりでなく経済関係、技術援助の方面でも早く日本はアフガニスタン公使館を設置すべきではないだろうか。（岩村 1954 : 3）。

1936 年からの数年間を日本で過ごしたアフガニスタン人留学生たちの留学目的は、前述のように、「学士の称号を得て帰国する」ことであり、そのために日本政府も特別の措置を講じたのであるが、他国に留学した者が博士号を取得して帰国しているのに対し、日本に留学した者は「学士の称号」しか得られなかったことから、アフガニスタンの官界で元日本留学生たちは他国に留学した者に比べて高くは評価されなかったようだ。

それでも、東京帝国大学経済学部を卒業したアブドラ・ヤフタリは官界で出世し、企画庁次官や専売局長官を務めた後、大蔵大臣に就任したという（関根編 2006 : 245）。彼は日本語が「達人」（東畑 1959 : 6）だったためか、日本からの訪問客とも会う機会が多かったらしく、日本の新聞紙上にもたびたび登場している¹⁰。アブドラ・ヤフタリは、国交回復後における初代の駐日アフガニスタン公使に擬されたこともあったらしい¹¹。

また、東京帝国大学文学部を卒業したアブドラ・ハーキムは文部省に入り、文部大臣まで務めたが（関根編 2006 : 245）、のちに最高裁判所の長官となった。最高裁判所長官在任中の 1970 年には日本政府（外務省）の賓客として日本を訪問し、佐藤栄作首相とも面談している（関根編 2006 : 233）。彼は滞日中の印象として、「日本はなつかしいが、すっかり変わった」との感想を残している（関根編 2006 : 233）。

その他の元日本留学生も、東京帝国大学農学部を卒業したゴラム・ナクシバンドは農政局長、東京工業大学紡績科を卒業したムハッド・ハッサンは国立紡績工場長、東京美術学校を卒業し

¹⁰ たとえば、東畑（1959）6 面、朝日新聞（1960）3 面を参照。

¹¹ 1953 年 8 月 2 日の朝日新聞（夕刊）は次のように報じている。「政府の要人たちの話では、アフガンの東京公使館は、遅くとも明年夏までには開きたいような意向だった。そして復活初代の公使にはアブドラ・ジャン専売局長官がなるだろう、というウワサが高い。ジャン君は東大法科（ママ）の出身で日本語はうまい。戦前東京にいた五人（ママ）の留学生は、今それぞれの地位を占めていて、みな「日本に行ってみたい、夢にも日本は忘れない・・・」と、私のところへ来ては“望郷”の嘆きをする。」（朝日新聞 1953 : 1）

たヌール・アーマッドは国立高等工芸学校長を、それぞれ務めた。そして、浦和高等学校から京都帝国大学工学部に進んだアブドラ・ラヒミも、「帰国後アフガニスタンの重要なポストに昇進」（花輪 1990 : 340）して、「鉱山局長」（関根編 2006 : 233）や「石炭庁総裁」（旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編 1990 : 379）を務めたという。

1970年代にアフガニスタンは、王政廃止から軍事クーデター、さらにはその後10年以上つづく紛争の時代へと入ることになるのだが、その激動期の只中であつた1980年7月に、アブドラ・ラヒミは「商用」（勝 1990 : 318）で来日している。この来日が1943年に日本留学を終えてから初めての来日だったのか、それともそれまでも何度か来日したことがあつたのかは不明だが、浦和高等学校理科甲類を1941年3月に卒業した彼の元同級生たちは、このアブドラ・ラヒミの来日、すなわち「当時すでに戦乱たけなわの母国をあとにしての久しぶりの来日」に際して同窓会を開催し、「過ぎし日の交友を語り合った」という（勝 1990 : 318）。この再会に際して元同級生たちは、アブドラ・ラヒミの「昔に変わらぬ達者な日本語に驚いた」（勝 1990 : 318）、あるいは「不思議に日本語全然忘れてなかつた」（旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編 1990 : 379）との感想を抱いている。

この1980年の同窓会の際に、アブドラ・ラヒミは元同級生たちにアフガニスタンの「住所を書き残し」た。このため、浦和高等学校の元同級生たちは、それから約5年後の1985年10月に再び同窓会を開催した際に、当該住所あてに手紙と寄せ書きを送つたのだが、その手紙は「数カ月後 MOVED-LEFT のペン書きが記されて返送されて」きた。また、彼の新しい住所については、「その後渋谷のアフガニスタン公館に問い合わせたが不詳」だったともいう（勝 1990 : 318）。

1980年7月に開催された同窓会以降のアブドラ・ラヒミの消息は不明である。彼の浦和高等学校時代の同級生たちは、それから10年後の1990年に『城北十里』と題する文集を発行しているのだが、その中で、ある元同級生はアブドラ・ラヒミに対して、「今、君はどこにいるのだろう」（勝 1990 : 318）と嘆じている。

8. おわりにー「まとめ」にかえてー

以上、1930～1940年代に6名のアフガニスタン人留学生が日本に留学することになった経緯を概観しつつ、そのうちのひとりであるアブドラ・ラヒミが浦和高等学校に進学することになった理由について考えてきた。その進学の理由について簡単に整理するならば、(a) 当時の日本政府は「日本文化宣揚」を目的として「アフガニスタン国留学学生招致」事業を立案したのに対して、実際に日本へ留学することになったアフガニスタン人留学生6名は「学士の称号を得て帰国する」ことを留学目的としており、この「留学目的」という点で両者の間には齟齬があつたこと、(b) その齟齬を解消するために、日本政府は特別の措置を講ずることになったのだが、一方で、アフガニスタンからの留学生たちも、「学士の称号を得て帰国する」ために、「留

学期間が如何に長引くとも苦しからず、目的に邁進する」と決意したこと、(c) ただし、日本の大学から「学士の称号」を得るのに必要な「アカデミック・ジャパニーズ」の能力がアブドラ・ラヒミの場合は不足していたのではなかったかと考えられること、(d) このため、彼だけは他の5名のアフガニスタン人留学生と異なり、大学ではなく高等学校に進学することになったと考えられること、(e) アブドラ・ラヒミが全国の高等学校の中でも浦和高等学校に進学することになったのは、これはあくまでも推測にすぎないのだが、招聘元（外務省・国際学友会）が彼を（他の5名のアフガニスタン人留学生の場合と同様に）東京または東京の近郊に住まわせて、その生活や学業の状況を把握しておきたいという希望があったからではなかったかと考えられること、の5点にまとめることができる。すなわち、アブドラ・ラヒミの浦和高等学校への進学は、「アフガニスタン国留学学生招致」事業が企画された段階では想定されておらず、招聘元が留学生自身の目的やニーズを汲みとろうとし、また留学生自身も「留学期間が如何に長引くとも」自らの目的を達成しようと決意した中で、生まれたものだったと言うことができる。

この「アフガニスタン国留学学生招致」事業は、戦後の1954年に開始された「国費外国人留学生制度」の先駆けとなる事業と位置づけることができる。現在、「国費外国人留学生制度」は、その種類が、研究留学生（大学院留学生）、学部留学生、日本語・日本文化研修留学生、教員研修留学生、高等専門学校留学生、専修学校留学生など多岐にわたり、また大学（学部・大学院）に進学予定の国費留学生のためには、全国の国立大学に日本語教育センターや国際交流センターが設置され、そこでは日常生活に必要な日本語だけではなく、大学で学習・研究するのに必要な日本語、すなわち「アカデミック・ジャパニーズ」の教育も行われている。旧制浦和高等学校の流れをくむ埼玉大学にも、1997年に留学生センター（2012年からは日本語教育センター）が設置された。

また、「アカデミック・ジャパニーズ」の中身や教育方法に関する研究は、とくに2002年における日本留学試験の開始を契機として急速に進んだ。2004年には日本語教育学会の中に「アカデミック・ジャパニーズ・グループ研究会」が設置されている。

これらの点を勘案するならば、アブドラ・ラヒミのように「アカデミック・ジャパニーズ」の問題に悩まされる留学生の割合は、以前に比べて今日では小さくなっているものと考えられる。しかし、「アカデミック・ジャパニーズ」の教育や研究がどれほど拡大・深化したところで、日本留学が成功するか否かの最大のポイントは、招聘元が留学生自身の目的やニーズを汲みとろうとし、また留学生自身も自らの目的を達成しようと決意・努力することにあることは変わりなからう。

参考資料

1. 外務省外交史料館蔵『在本邦各国留学生関係雑件（中国留学生ヲ除ク）18. 阿富汗国』（JACAR：B04011346500）
2. 外務省外交史料館蔵『在本邦各国留学生関係雑件（中国留学生ヲ除ク）1. 一般』（JACAR：B04011347000）
3. 外務省外交史料館蔵『在外本邦留学生及研究員関係雑件：第二巻 14：アフガニスタン（1）一般』（JACAR：B04011356900）
4. 防衛省防衛研究所蔵『「アフガニスタン」国政府派遣学生の見学に対し便宜供与方の件』（JACAR：C04014773100）

参考文献

1. 朝日新聞（1942）「国への良い土産」朝日新聞 10月12日（朝刊）、2
2. 朝日新聞（1953）「アフガニスタン物語（中）戦闘機はわずか、田舎の店にも日本雑貨」朝日新聞 8月2日（夕刊）、1
3. 朝日新聞（1960）「アフガニスタンの旅—アフガンの外人たち」朝日新聞 8月12日（朝刊）、3
4. 岩村忍（1954）「アフガニスタンを探る」朝日新聞 4月12日（朝刊）、3
5. 浦和高等学校（1940）『浦和高等学校一覧：第18年度（自昭和14年至昭和15年）』浦和高等学校
6. 浦和高等学校（1942）『浦和高等学校一覧：第20年度（自昭和16年至昭和17年）』浦和高等学校
7. 外務省（1939）『世界に伸び行く日本語』外務省文化事業部
8. 外務省文化事業部（1936）「昭和十一年度執務報告」外務省文化事業部編『外務省執務報告：文化事業部』クレス出版（復刻版）
9. 外務省文化事業部（1937）「昭和十二年度執務報告」外務省文化事業部編『外務省執務報告：文化事業部』クレス出版（復刻版）
10. 外務省文化事業部（1938）「昭和十三年度執務報告」外務省文化事業部編『外務省執務報告：文化事業部』クレス出版（復刻版）
11. 外務省文化事業部第二課（1939）「昭和十四年度執務報告」外務省文化事業部編『外務省執務報告：文化事業部』クレス出版（復刻版）
12. 勝正一（1990）「雑感」旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編『城北十里—旧制浦和高等学校第十七回文集—』、316-318
13. 鹿取泰衛（1990）「愚行の果て」旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編『城北十里—旧制浦和高等学校第十七回文集—』、113-115
14. 金澤謹（1973）『思い出すことなど』国際学友会

15. 河路由佳 (2006) 『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生－戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開－』 港の人
16. 河路由佳 (2009) 「戦時中の鈴木忍・高橋一夫と日本語教育－1974年の座談会録音テープより(1)－」 東京外国語大学編『東京外国語大学論集』第78号、303-316
17. 北田正元 (1938) 『中央アジアの回教国－アフガニスタンの話－』 外務省文化事業部
18. 旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編 (1990) 『城北十里－旧制浦和高等学校第十七回文集－』
19. 巖平 (2009) 「官立高等教育機関における留学生教育の成立と展開－第三高等学校を事例として－」 『京都大学大学文書館研究紀要』第7号、1-19
20. 神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫「東京日日新聞」文化3-059
21. 国際文化振興会 (1934) 『設立趣意書、事業綱要及寄附行為』 国際文化振興会
22. 関根正男編 (2006) 『日本・アフガニスタン関係全史』 明石書店
23. 竹本陽乃 (1995) 「昭和初期国際学友会のアフガニスタン学生招致事業」 『国学院雑誌』第96巻第10号、40-51
24. 東畑精一 (1959) 「アフガニスタン記」 朝日新聞2月6日(朝刊)、6
25. 日本文化人類学会 (1954) 「学会消息」 日本文化人類学会編『季刊民族学研究』第18号、pp.280-281
26. 花輪経男 (1990) 「思い出すままに」 旧制浦和高等学校第十七回文集編集委員会編『城北十里－旧制浦和高等学校第十七回文集－』、338-340
27. 讀賣新聞 (1938) 「アフガン留学生に東大の門開く：実力試験して正式の本科へ」 讀賣新聞3月1日(夕刊)、2